

花笠文京年譜稿（上）

木 越 俊 介
Shunsuke KIGOSHI

はじめに

天明五年乙巳（一七八五・一歳）

幕末期に活動した狂言作者兼戯作者・花笠文京について、稿者はこれまで「代表作屋大作」花笠文京の執筆活動について（『近世文芸』69号、一九九・一）、「花笠文京と劇界」（『芸能史研究』146号、一九九・七）において伝記的事項や執筆活動とその特色をまとめた。本稿はその後の調査を踏まえ、前掲稿に対する補正、補訂なども含めた文京の生涯とその活動の総体を年譜形式としたものである。

凡例

一、◆は文京自身の著作や芝居への出勤、◇は他人へ寄せた序跋や関連事項を示す。

一、芝居の出勤に関しては、「鶴屋南北作者年表」（『鶴屋南北全集』12、一九七四、三一書房）に拠った。

一、現時点で判明している事実に基づき作成したが、特に天保以降の芝居の出勤状況については未詳な点が多いことを断っておく。

一、合巻作品については、作中の主要人物のうち役者似顔が判明したものを各項目末尾に掲げた。

◇東条黙齋の長男として生まれる（碑文に記載される没年より逆算。

父の名については、ロバート・キャンベル氏「東條琴台伝記資料攷（上）（下）」『年報』第7、10号、一九八八・三、一九九一・三、実践女子大学文芸資料研究所』によった）。

※この後、いずれかの年に四世鶴屋南北のもとに弟子入り。

文化八年辛未（一八一・二十七歳）

◆十一月、市村座『いづくしまゆまのみてぐ厳島雪官幣』他。

※狂言作者としての「花笠魯助」の名が初めて確認され、初出勤は本年のことと見られる。

文化九年壬申（一八二・二十八歳）

◆一月、市村座『はつわかなはるつげそが初松鶯曾我』他。

◆三月、市村座『あなはなまのなご姿花江戸伊達染』他。

◆十一月、森田座『雪芳野来人顔鏡』他。

文化十年癸酉（一八一三・二十九歳）

◆一月、森田座『例服曾我伊達染』他。

◆三月、森田座『お染久松色讀販』他。

※天保二年刊『於染久松色読販』の文京序で、この当時は回想して
いる（↓天保二年の項参照）。

◆四月、森田座『濱真砂劇場絵本』他。

◆六・八月、森田座『尾上松緑洗濯談』他。

◆九月、森田座『男一足達引安賣』他。

◆十一月、森田座『御最前繫馬』他。

◆閏十一月、森田座『辰橋閨顔鏡』他。

文化十一年甲戌（一八一四・三十歳）

◆一月、森田座『双蝶同假粧曾我』他。

※この間、他に出勤あるか、未詳。

文化十四年丁丑（一八一七・三十三歳）

◆十一月、都座『恵咲梅判官最前』他。

文化十五年（文政元年）戊寅（一八一八・三十四歳）

◆二月、都座『曾我梅菊念力掻』他。

◆三月、中村芝翫著『歌舞伎雑談』に跋す（『続日本随筆大成』9〈吉

川弘文館、一九八〇）に翻刻がそなわる。

後叙

欲雨雨弗果徒昏未午天と李子が佳句の春蔭、梅の盛はとく過て、桜のうはさを咄に聞き、花を見るさへまゝならぬ、我生業のいそがしさ。下手の画きし人丸歟、板木師など見るやうに、年中机にむかへども、述て作らぬ本文を、せう事なしに守るのも、戯場は例の別世界、ヤレ顔見せよ春狂言と、あとの替りにおひたてられ、あけしい間はない折から、扉を敲て訪来るは、双鶴堂の主人也。懐中より一小冊をとり出し、速に校せよといふ。予読事半にして、大に歎じ、常に親しむ俳優に、かゝる著述のあらむとはしらぬ燈臺もとくらく、挑灯持の行潦、自心に恥入て、役者ながらも筆まめに時々著述のある中に、おこがましくも作者のはしくれ、あたら月日を徒に、何の案もないせうく椽の下の力持を辻打の鳴物にて、楽屋で声のかれ是と、尻馬ならぬやじ馬の、其跡足の定役にも、およはずながら倉卒の校合ついで、漫に誌す。

戊寅三月上浣 花笠文京「文京」

◆五月、都座『松竹梅東鑑』他。

◆十一月、玉川座『四天王産湯玉川』他。

文政二年己卯（一八一九・三十五歳）

◆一月、玉川座『恵方曾我万吉原』他。

◆三月、玉川座『病花千人禿』他。

◆四月、玉川座『假名手本忠臣蔵』他。

◆五月、玉川座『梅柳若葉加賀染』他。

◆七月、玉川座『蝶鶴山崎踊』他。

文政三年庚辰(一八二〇・三十六歳)

◆十一月、河原崎座『伊勢平氏額英幣』他。

文政四年辛巳(一八二一・三十七歳)

◆春、春本『筑紫琴』第一、二巻を「曲取主人」(二代目)名義で刊行。本書は『国書総目録』に花笠外史(文京)の著作として項目が掲げられているものの、「日本艶本目録(未定稿)による」とされており、稿者は原本未見。ただ、林美一氏『艶本江戸文学史』(河出文庫、一九九一・原書『艶本江戸文学史』有光書房、一九五四)に「最もよく江戸読本のスタイルを備えた艶本作品」の一つとして一部が紹介されているため、該書から以下に引用しておく。

特に「筑紫琴」は冊数まで読本の基本冊数である一編五冊をまもっている。作者の曲取山人は先にあげた『戀のやつぶぢ』の作者・曲取主人と同一人だが、これは二代目で、戯作者の花笠文京の隠号である。初代はもちろん、号の酷似からも想像がつく通り、「八犬傳」の作者・曲亭主人こと曲亭馬琴である。ただし本書巻一の見返しには「曲取主人醉中編」となっているが、巻五の奥付には、一・二・三巻が曲取主人著で、四・五の巻は大鼻山人著となっている。大鼻山人とは(略)鼻山人の隠号である。また画者の淫乱斎白水は、(略)溪斎英泉である。(略)著者の曲取主人が、どの程度中国文学の知識を持っていたかは不明だが、本書は右の『西廂記』(この直前に梗概が紹介されている―引用者注)の他、中国の艶笑本に見られる唐の玄宗皇帝の淫楽生活のエピソードを、重氏におきかえて色々と取入れている。(略)これを並木宗輔作の

浄瑠璃『苺萱桑門築紫轡』を経糸にして一編の読本として構成している。本書の書名『艶戯筑紫琴』はここから来ている。

◆一月、河原崎座『三賀莊曾我嶋臺』他。

◆三月、河原崎座『三賀莊曾我嶋臺』他。

◆五月、河原崎座『敵討櫓太鼓』他。

◆七月、河原崎座『玉藻前御園公服』他。

◆九月、河原崎座『菊宴月白浪』他。

◆十一月、河原崎座『妹背山眺望千本』他。

文政五年壬午(一八二二・三十八歳)

◆合巻『玉藻前化粧姿見』刊行。

〈作者〉扇舎梅幸(尾上菊五郎)、〈画工〉歌川国次、〈板元〉伊藤与兵衛

※文政四年七月十七日から河原崎座で上演された『玉藻前御園公服』の正本写。本作については佐藤悟氏による影印・解題が『実践国文学』34(一九八八・一〇)、翻刻が同35(一九八九・三)に備わる。以下、本作についての役者似顔に関しては、佐藤氏の指摘によるものである。

玉藻の前Ⅱ三代目尾上菊五郎、蓮華坊Ⅱ二代目関三十郎、那須宗重が妻藻女・非人おさきⅡ二代目中村太吉、衛士又五郎・小女郎兄籐兵衛Ⅱ初代嵐冠十郎(以下略)。

◆一月、河原崎座『松梅鷲曾我』他。

◆二月、河原崎座『鳴立澤虎礎』他。

◆四月、河原崎座『遅櫻愛宕韻』他。

◆七月、河原崎座『霊験亀山鉾』他。

◆十一月、市村座『御鼻肩竹馬友達』他。

文政六年癸未(一八二三・三十九歳)

◆合巻『むすびあふえんのいろいと結合縁色絲』刊行。

〈作者〉尾上菊五郎、〈画工〉歌川国貞・歌川国丸、〈板元〉山口屋藤兵衛 権八・小紫もの、他「本町二丁目」の世界。

白井権八(お祭り小僧左七) 三代目尾上菊五郎、絹糸屋弥市 三代目坂東三津五郎、小糸 二代目岩井兼三郎、幡時九郎兵衛 二代目松本幸四郎、本庄綱五郎 七代目市川团十郎、小紫 五代目岩井半四郎、お房 五代目瀬川菊之丞。

◆合巻『あだまにしむすぶのかみぢ仇縁誓紙治』刊行。

〈作者〉扇舎梅幸(尾上菊五郎)、〈画工〉歌川豊国、〈板元〉丸屋甚八 梅川・忠兵衛もの。

野風亀藏(亀屋忠兵衛) 三代目尾上菊五郎、梅川 五代目岩井半四郎、おすわ 五代目瀬川菊之丞、田宮次兵衛元春 三代目坂東三津五郎、小春 二代目岩井兼三郎、紀伊国屋次右衛門 五代目松本幸四郎、忠三郎 七代目市川团十郎。

◆一月、市村座『八重霞曾我組』他。

◆三月、市村座『浮世柄比翼稲妻』他。

◆七月、市村座『やままたやまはなのやまがつ慢雑石尊臚』他。

◆十一月、市村座『大和花山樵』他。

文政七年甲申(一八二四・四十歳)

◆合巻『はつかりくものいろいと初便廓言伝』刊行。

〈作者〉尾上梅幸(菊五郎)、〈画工〉歌川豊国、〈板元〉丸屋甚八

※前年刊『あだまにしむすぶのかみぢ仇縁誓紙治』の続編。梅川・忠兵衛もの。

梅川 五代目岩井半四郎、おすわ 五代目瀬川菊之丞、小春 二代目岩井兼三郎など(以下略)。

◆一月、市村座『なましのふじかね假名曾我當蓬萊』他。

◆三月、市村座『ばたんでうはつがふぼこ牡丹蝶初篋』他。

◆五月、市村座『繪本合法衛』他。

◆八月、市村座『妹背山夫婦庭訓』他。

◆二世南仙笑楚滿人作・人情本『しやせうこてい拾妻雪古手屋』初編に序、後編下の巻に跋を寄せる。

(初編序)

叙言

明烏後の正夢吉兆を得て。発兌の期をいそぎ。軒並昔八丈。むかしにかはらぬ著述の繁昌。軒をならべて書鬻ぐ。向三軒両隣。かくさへあたり物の本。當時萌出の楚滿人なるもの。書の林に斧を入れて。伐木の声丁々と。四方の山々笏して。響に應ずる稿本も。しげき言の葉掻集め。落葉にあらぬ雪の古亭塾。ふる手な趣向もあたらしく。仕立あげたる重妻。裙先揃ふ小袖の裾に。仕着麻をとりてめせといふ。

癸未／仲夏／花笠外史〔印〕

晋米齋玉粒画〔印〕

(後編下之巻)

跋

口仗の愛敬にて齒磨を賣。大太刀を抜て圓丹を弘む。馬を吞放下。重きを鉤る伝受。手拭の蛇。能人の足を止むとかや。されば放鱧を商ひながら。網をすく爺あれば。耳には珠数を掛てゐて。蛤をむく婆も有。地獄天道過去現世。岐路かけての世営に。やらざ脱さぬ書林の裡に。遠は浪華の八文字屋自笑。近は江戸の耕書堂唐丸なり。自著述を梓行して。年毎に利潤せり。爰に二代の南仙

笑楚満人なる者。表向は書肆の越長。内職は作者の二役。好こそ物の常なりに。昼は終日世利に走り。夜は燈下に机と首曳。その上根にて戯作げばきを。やつて見る気は中々に。どうしてなど、固辞で

乗ず。倩世間を見渡ば。角兵衛獅子の鈍さへ。軽業の新手を工夫し。何某精舎の建立に。鶏のまねする法師の機転。押手の強いが当時の流行。哥々怒話尊者の羅漢まはし。さて其次の羅貫冲。稗史作者の面倒なるも。哥舞伎作者の無造作なるには如ざるべし。枕を碎たせりふさへ。初日にはうろ覚。二日目は丸で忘れ。又三日めは飛で不言。遂それなりに脱しても。入木をずる世話もなく。校合する煩なしと。狂言綺語に執成て。前に発行せしお妻八郎兵衛が情史の一編。幸にもてはやされ。今後帙三冊稿成て予に投す。一枚畢て嘆て曰。読本でなく哥舞伎にあらず。原来一家の文体は。楚満一流の深山の桜。花を咲せて数回も。亦やき直す肖像の陶皿丸く納てしつくりと。合しかひの蛤に。筋の通りし鰻谷。前後續て一覽の上。高評を給へかし。

文政七年甲申の夏日深川仲町何某の樓上に暑を避て／花笠文京戯誌「狂言作者」

文政八年乙酉（一八二五・四十一歳）

◆合巻『流行歌川船台奏』刊行。

〈作者〉尾上梅幸（菊五郎）、〈画工〉歌川国貞、〈板元〉丸屋甚八
お亀与兵衛もの。

与兵衛 三代目尾上菊五郎、お亀 五代目岩井半四郎、小八 五代目松本幸四郎、柝屋 三代目坂東三津五郎、藤九郎 二代目坂東彦左衛門。

◇冬、三代目尾上菊五郎とともに上方へ行く。

文政九年丙戌（一八二六・四十二歳）

◆合巻『尾上松緑百物語』刊行。

〈作者〉尾上菊五郎、〈画工〉二世歌川豊国（1ウ・2オのみ初代歌川豊国）、〈板元〉鶴屋喜右衛門

※「因縁につながる長繩の漁船はなまぐさい中の小はだ小平次が弁」「遠州にたよりを求し源太郎が拾ひ金にせまい心の車寺の弁」「奥州に聞へたる宇原長者がてんかんやみの本妻があぶくま川の弁」「傾城の心の底はつめたい井戸の車めぐり来る千里が弁」「近藤悟八がむり所望の妾に女郎買のぬかみそおたつが弁」の五話の怪談話からなる。三代目尾上菊五郎、五代目瀬川菊之丞、三代目坂東三津五郎、二代目坂東彦左衛門などの似顔使用。配役は略す。

◆合巻『児桜法華房』刊行。

〈作者〉尾上菊五郎、〈画工〉五渡亭国貞、〈板元〉和泉屋市兵衛
「日蓮上人」の世界。

吉祥丸（後の日朗法師） 三代目尾上菊五郎、四条河原の金吾・実は五尺染五郎 七代目市川団十郎、東条左衛門 初代嵐冠十郎、釜屋武兵衛・平の左衛門 二代目坂東彦左衛門、貫名御台七里姫 五代目瀬川菊之丞、船頭弥三郎 三代目坂東三津五郎、北条長時 二代目関三十郎、おでん 五代目岩井半四郎、お杉 二代目岩井糸三郎。

◆合巻『新皇国文字娘席書』刊行。

〈作者〉尾上梅幸（菊五郎）、〈画工〉五渡亭国貞、〈板元〉丸屋甚八
世界不明。

武庫十平次 三代目尾上菊五郎、おかな（いろは） 五代目瀬川菊之丞、刀屋新助 三代目坂東三津五郎、鮫鞘新助 七代目市川団

十郎、矢八〇五代目松本幸四郎、お時〇五代目岩井半四郎、お吉〇二代目岩井兼三郎。

◆合巻『東海道四ツ家怪談』刊行。

〈作者〉尾上梅幸（菊五郎）、〈画工〉深齋英泉、〈板元〉若狭屋与一
 ※本書は『東海道四谷怪談』初演の翌春に刊行された正本写で、小池章太郎氏『鶴屋南北の世界』（三樹書房、一九八一）に翻刻、解説がある。氏は台帳と本書の関係について「草双紙化するに当って、公刊の性質上、風俗的な規制は板行の書籍の場合、芝居よりもきびしかったと考えてよいと思う。それは、本書と芝居台帳とを比較すれば瞭然だが、たとえば地獄宿におけるお大の猥雑な活躍や、三角屋敷における直助・お袖の濡れ場などが、各所に臙化、もしくは省略されている」（傍点原文、以下同）とし、また本書については次のように述べている。

文章や詞は、当時の草双紙特有の、慣習化されていた七五調に近い整理がなされていて、原作のもつヴィヴィッドなセリフの持味には到底およびず、また、文京が上坂を控えての、倉卒の執筆であったためか（序文にこの旨の記載がある―引用者注）、「この女は大泥棒だ。様子を聞けば、此野郎も、なにか囁く話の様子」（地獄宿の場での直助のセリフ）などといった、いささかやつつけ仕事的な措辞の拙なさが、かいま見られる。

とはいえ、本書の原作に対する副本としての存在価値は、いささかも減じられることはない。地獄宿の場での世話木戸に掲げられた灸点所の絵看板のありかたなどに見られる絵画資料としての価値の高さは無論のこと、テキストの校異に関しても甚大な影響を及ぼさずにはいない。

氏は本書に資料的価値を置き、引用箇所後に具体的な問題点をいくつか掲出している（それについては省略）。また、高橋則子氏は「四

谷怪談・似顔象嵌の合巻」において、本書の後摺本（外題『東街道四ツ家怪談』）が、初摺の「登場人物の似顔象嵌（俗に雁首すげかえ）と、お岩の扮装及び一部の場面の改変を行った合巻」であり、「天保七上演の歌舞伎の役者を、似顔で表した作品」であると報告し、その時の上演における演出等について考察している。以下の初摺時の役者似顔の確定も高橋氏の指摘に従った。

神谷以右衛門〇七代目市川団十郎、佐藤与茂七〇お岩〇小仏小平〇三代目尾上菊五郎、直助の権兵衛〇五代目松本幸四郎、おもん〇お袖〇二代目岩井兼三郎（以下略）。

◇三月刊、洒落本『色深狭睡夢』（葦廼屋高振著、柳園種春校訂、河内屋茂兵衛他三肆板）に跋す『洒落本大成』27へ中央公論社、一九八七〇所収。跋は本作の画工である歌川貞春の改名披露の口上であるが、中に「朋友の中にも別懇の国貞が弟子の儀にござり升れば」とあり、文京と国貞との親交が窺える。末尾に「なには津の梅の蒼のかうばしく／春のめぐみに名をやひらん」という文京の歌を掲げる。なお、貞春と文京の口上の図がある。

◇十一月、梅幸送別の句会を催すか（中之島図書館蔵・貼込帳『楠里亭其楽集・楠里亭蔵帖』所収の案文、佐藤悟氏・ロバート・キャンベル氏御教示）。

花笠氏の梅幸におくれたりしは、はなちる里の青葉ならず紅葉のあとの落葉と共にこそくといなれんも本意ならずと、浪花に聞えし君たちの詩哥連俳をば乞うけて、故郷のつとにさせんとす。尤俄の催なれば、四季題詠のうち一章御加入希たつ鳥濁の譏まぬがれずといへど、始有て終なき梅のさちを恨といふ

戌十一月 谷清好欽白

右繪入奉書小本に仕候間来十七日までに御出詠奉認申上候。
 同廿日石町い勢屋掬趣楼におゐて、龜酒呈上御出席奉願上候。

補助 鷗屋丹水／再会楼万醉／春晓斎／柳園種春／僊花園

◇役者番付の広告と思われる一枚摺が二点、『許多脚色帖』二・四(『日本庶民文化史料集成』14〈三一書房、一九七五〉所収)に確認できる(神楽岡幼子氏御教示)。それぞれ、「頭取曰 昔よりの役割番付を揃て数十冊といたし升たれば……(以下略)／文政九丙戌年季夏尾上菊五郎と、もに京都四条東芝居に／あるとき木屋町の寓居に於て自笑の評判記の口調に倣て／花笠魯助文京戯作「文京」[狂言作舎]」……吉野の花守子が蔵するところ。新古狂言の番付を一覧して感あり。……／文政九年丙戌年陽月／江戸 花笠魯介漫述[狂言作舎]「文京」。

文政十年丁亥(一八二七・四十三歳)

◆合巻『志賀春金漣』刊行。

〈作者〉市川三升(団十郎)、〈画工〉歌川国貞(表紙のみ)・北尾美丸、〈板元〉山本平吉 世界不明。

稲のや半兵衛・後の宥昌法師 三代目坂東三津五郎、蛭谷弾正 五代目松本幸四郎、近江粟津之助景氏 三代目尾上菊五郎、平野屋小いな 二代目岩井兼三郎(本編) 五代目瀬川菊之丞、浮橋 五代目瀬川菊之丞、日吉近江之助恒世 七代目市川团十郎。

◆合巻『枝珊瑚京打筭』刊行。

〈作者〉尾上梅幸(菊五郎)、〈画工〉歌川国貞、〈板元〉佐野屋喜兵衛 世界不明。

因果九蔵 七代目市川团十郎、お百合 三代目尾上菊五郎、求五郎 三代目坂東三津五郎、正兵衛 五代目松本幸四郎、お珊 五代目瀬川菊之丞、小万 五代目岩井兼三郎、漢兵衛 二代目関三

十郎、犬之進 二代目坂東彦左衛門。

◆合巻『想合对菅笠』刊行。

〈作者〉尾上梅幸(菊五郎)、〈画工〉二世歌川豊国、〈板元〉山本平吉 お夏・清十郎の世界。

清十郎 三代目尾上菊五郎、六三郎(清十郎の変名、最終丁のみ) 三代目坂東三津五郎、お夏 五代目岩井兼三郎、福島屋清兵衛 五代目松本幸四郎、かしく 五代目瀬川菊之丞、権平 二代目関三十郎。

◆合巻『四ツ家怪談後日譚』刊行。

〈作者〉尾上梅幸(菊五郎)、〈画工〉溪斎英泉、〈板元〉若狭屋与一 新藤九十郎(口絵) 七代目市川团十郎(本編) 三代目尾上菊五郎、おかる・お花 五代目瀬川菊之丞。

文政十一年戊子(一八二八・四十四歳)

◇鶴屋南北作・合巻『怪談岩倉万之丞』(山本平吉板)の前書きの挿絵

(大坂の貸座敷で役者たちが五運から話を聞いている図)に、尾上菊五郎、尾上菊次郎、尾上松助、松本錦吾等と共に文京が記されている。「大坂の宗匠五運は『摂陽奇観』に出てくる、大坂の素封家の吉野五運で、『許多脚色帖』の編者でもある。菊五郎の鼻祖であったのである。」(『鶴屋南北全集』第五卷・解説、一九七二)との指摘がある。

◆合巻『近藤次郎 繪双白漣』(初編)刊行。

〈作者〉尾上梅幸、〈画工〉五渡亭国貞、〈板元〉丸屋甚八

※初編のみ花笠文京代作。二編は文政十三年刊で円寿堂主人序(作もか)、画工・溪斎英泉。佐藤悟氏による解題と影印が備わる(『実践国文学』54、一九九八・十)。

近藤篤次盛秀 五代目松本幸四郎、赤月星五郎・瓶三郎 七代目市川団十郎、糸之助孝忠 五代目若井半四郎、お梅 三代目若井 糸三郎、花園 三代目若井糸三郎、梶太夫 二代目関三十郎。

天保元年庚寅（一八三〇・四十六歳）

◇『江戸現存名家一覽』^②（刊年未詳、天保初年か）「作者」の項に名が
あがる。

天保二年辛卯（一八三一・四十七歳）

◆『役者風俗三國志』（画・柳斎重春、河内屋太助他三肆板）刊行。

◇十月刊、松鱸一世編『滑稽発句類題集』二編（梅薫楼蔵板、売弘所
大阪塩屋喜助他五肆、西川信春挿画）に序並びに校閲する（本文末
尾に「東都四代目川柳翁風流庵社中／素行堂松鱸漫撰／花笠外史双
枕聞」とある）。

序

風の柳に雪折なく柳の風に靡きしは元祖川柳子の口調なり。九十
余年の今も猶枝葉ますくおい茂り長堤廣野に林をなせり、切字
去嫌の究屈なく偶成の開放題も自一家の風韻備りて森羅萬象を壺
中に湛え、其仙骨を獲者は、句意のはたらき自在をなして、今古
の秀一事々物々、其機に臨み其場の類辞まのあたり見るが如く、
聞者絶倒せざる事なし、いかなる知識学士でも忽ち言下に感喟し
て、一点の非を打者なきは川柳点の風調なり、宜なる哉人情世態
を盡もの、此右に出る事有べからず、前に浪花に、柳多留を根分
して滑稽句集といふものあり、撰者頗培に疎題にそむけて植置た
り。書肆夫次編を求めども未はたさず、去庚寅の冬東都の松鱸風

士西遊して浪速に杖を曳、類題狂句の選集成す、原来題詠する物
にあらね共、一すぢに此道をたどる初心の為に葉とせば、ひと株
の楊柳蔭をなさん事はやく句造り肥す芽生の種にして、かざる詞
の花にも恥ず、あけていはれぬ管柳、枝をつらぬく白露の玉をな
らぶるたま柳しだれ柳の未永く、くり返し／＼詠れば、みどり色
ます風見草、解も結ぶも句案の達者に至らんと其青柳の緒にしる
す

誹風によく靡ひたる柳かな 双枕

双枕亭と異名して芽を出す作者のさしやなぎ

辛卯の春 花笠外史「文京」

友人 栗亭文馬

◇素行堂松鱸編『狂句むめ柳』^④（大阪塩屋喜助板）に序す。

（初編・序）

狂句梅柳序

東都の柳樽の諸白を浪速に積登せたる醇酎にして。三國一の美味
なれば富士見酒とは命たり。汲ども尽ぬ狂句の流行。九献といふ
は句の数を。根よくついで重ね給へど。取持顔に進むるは。交り
ふかき上戸同士。詩歌管絃の坐興にも。肴代りの一唱三嘆。妙で
五絶の一口より鼻を穿て芳しければ。予も此道の下戸ながらその
香に酔てとも／＼に舌もまはらぬ筆とりて。チヨト呑ぐちをひね
るになん。

花笠外史

浪華定連月並會寅十一月二日開卷

東都川柳側素行堂松鱸撰

岡田甫氏は「川柳作家松鱸について」^⑤において、松鱸と文京の関わ
りについて、「その（文京の）引用者注）大阪滞在中に松鱸が浪花に
現われたわけで、芝居好きの松鱸ともすぐ近づきとなり、「類題集」

の仕事も専門家の松鱸に依嘱したものにちがいない。花笠文京は狂歌はよくしたが、柳句の方は門外漢であった。しかしこれが機縁で「梅柳」にも序文を二度書き、句会にも列席している。」として、ただし稿者は、文京の「梅柳」への二度目の序文ならびに句会への出席については未確認である。

◇二月、鶴屋南北作絵入根本『於染久松色説販』（河内屋太助、鶴屋喜右衛門他二肆板。刊記は天保二年「季秋」とある）に序す。

詩は画の聲色にして画は詩の身振なりと宜なる哉、其無声の詩を写して有声の画をなすものは、江戸一流の芝居役者の似顔なり、頃日文金堂の主人世話狂言の根本を、一部の稗史繪本に更て梓行す其稿本は吾師鶴屋南北が手澤なり、老人始の名は勝俵蔵、故人魯風魯風役者の姓名の女を妻とし、其因をもて南北と名のる、近世江戸狂言の仕ぐみ翁がために一變す、取分松本幸四郎、阪東三津五郎、岩井半四郎、此三人の立者を使役て一時の雷名、人の耳目を驚す、此正本も其狂言中の一なり將其俳優を臨すものは香蝶樓の主人なり例の妙を画き、其神にせまり各容貌に声有て無声の正本に有声の下座鳴物を添たるがごとし、往事夢に似たり、原来此狂言を仕ぐみしとき、予師の許に在て草稿を校正し、且正本をひかへて稽古し、初日の労もたちまち忘れて、古今の繁昌なるは皆人のしる所なり、過し乙酉の冬、僕尾上菊五郎と、もに浪花に來、阪町に客たる事おもはずこゝに年あり、此書刻成て校合は泊鷺の手を経たりと聞ども予未其人をしらず、嗟此狂言の案を起して枕を碎きしも、今を去こと既に十九年作者は亡師鶴屋南北なり、画工は友人歌川国貞なり、頻に故郷なつかしく、懐旧に堪ず、教行を題して以て序とす

在浪華 花笠魯介述「狂言作者」〔文京〕

山田片輝書〔印〕

なお、本書にはもう一つ「天保二卯年如月」の年誌をそなえる文京の序があり、その末尾には「此一章は往る年亡師南北が著編の序にしろせしを。西遊の後予が名を削て蓬萊山人とやら自名を加へたれど。戯作者流のいふて専なきことなれば今またこゝに載るのみ」とある。右の「亡師南北が著編」とは文政十一年刊合巻『裙摸様沖津白浪』に該当し、該書はほぼ同文の蓬萊山人名義の序をそなえる（序の引用は略す）。

◇『猿狂句集』（本文末に「天保二年辛卯年秋刻成 花笠外史」とある）に跋す。

よし野竜田の花紅葉は噂に聞斗、須磨明石の月みんこと、今年はくと思ふのみにて、いつしか浪速に五歳を重しに、己丑の夏おもひかけず、東都吾俳優の巨擘、ひそかに林泉逸士と異名しつ、庚寅の秋まで他邦に在ること期年に余れり、其中に筆を染ざる日ともなく、当意即妙の達喩に、句作りの手強きには荒事の家風そなはり、口合の滑稽には代々の口調連綿たり、原より一時の座興に成れる狂歌発句の数多けれど、草稿といふ物もなく昨日の出たらめ意に残さず、けふハ今日にてあたらしく、句案にことはかゝざれども、後々は自も忘れはて其まゝに失なんことの惜ければ、予羈窓を訪毎に、側より書とゞめしもはや一冊とは成にたり、就中三筋鼻肩の棟梁たる公水宗匠ともに一枝を加へて、席上にかいやり捨たる扇子短尺画賛の類、すべて深くひめ置給ふをさへ竅もとめ、または人の口づからいふ句をも載たればてにはの違も有ぬべし、必しも編者の杜撰を句主に負し玉ひそと、其断を爰にしるす／在浪華花笠外史／友人葉亭書

この文面にもあるように、文京の在坂中の天保元年（庚寅）に、七代目市川團十郎が高野山参詣の折に上方に寄り面会したらしい（魯文の注3前掲記事にもこの事に触れる）。

◇十一月『市村座顔見世番付』に名があがるが出勤せずか。⁶⁾

◇この頃、文京が上方で「本読会」を計画していたことが西沢一鳳軒『伝奇作書』初編(天保十四年成立)下の巻「西沢一鳳軒が傳」に見える。

天保の始の頃東都戯作者花笠魯助浪華に來り催主となつて一泉皇徳山真島が原金澤龍玉兼茶園一泉等と共に本讀會をせんと謀りしも魯助文京は東都に歸り梅玉一泉も故人となり晝瓶とはなれりける

省略するが、この後に「新狂言月並本讀會」と題され、「判者西沢一鳳軒」「助聲奈河一泉堂」「催主/金澤龍玉/花笠魯助」とされた摺物の写しが掲げられている。

天保三年壬辰(一八三二・四十八歳)

◇十一月十六日、江戸へ歸る(『渡世肝要記』三編下巻の記述による)。

【注】

(1) 『歌舞伎研究と批評』6(一九九〇・十二)。

(2) 『近世人名録集成』(勉誠社、一九七六)による。

(3) 魯文は、『仮文記珍報』中「狂言作者滑稽伝」花笠魯介の回(『歌舞伎新報』五四四・五四七号、一八八五・五・十六、二十)で、文京が在坂中、「妻の内業に堀江の地に犯屋を開店して双枕亭と家号す」としているがこの事実¹⁾は未詳。

(4) 引用は未刊雜俳資料十七期11による。

(5) 『江戸文学新誌』5(一九六一・五)。

(6) 古井戸秀夫氏は「天保二年十一月、久方ぶりで大坂から、菊五郎の市村座に出勤することになっていた文京こと花笠魯助は、結局出づじまいにおわっている」(『鶴屋南北(一)』『近世文芸研究と

評論』20、一九八一・六)と指摘するが、稿者未確認。

(7) 引用は、『新群書類従』1(国書刊行会、一九〇六)による。

(日本近世文学)